



報 讎
奇 談

自來也說話

二

~ 13
3329
2



門 へ13
3329
2

報仇
奇談

自來也説話卷之二

武江

感和亭鬼武著

高喜齋校合

大正十年八月廿九日
本大學出版部
贈

正村景國為同役 併 自來也詮義糸

三畧曰端未見人莫能知天地神明與物推移變動無常因
敵轉化不為事先動而輒隨と 借も彦山まで源太郎は老父
其樂亦を幸に推三千兩乃金を奪ひ盜賊ハ元拔後の國竹侯改信の
三永臣鹿野苑軍太夫と云一者成が元来奸佞邪智の曲者ま
已鈕袂子逸せしを自贖て人女睥睨藩中に疎れ放蕩るる牙
仍て竹中竹侯家を追放子逢ひ身は並所形如まに山賊と成て

自來也説話卷之二

何れぬが流産山まで在赤井を討て令子を奪ひて令をとりて
 身の廻り成信ひ銀櫛中たに細く有附を捜求し程は同国
 新渾子あやりらるる中頃椎津乃越願丸門之助国時父は久を
 在陳倉の中新渾造を忍く松次は折柄因形昆沙門造と
 いへるあまうと風目子歩し婦人なりぬ近習乃者を以て内
 尋くく子因中道住屋傳七乃抱へ清野とくるあめりとも
 玉ひ染が艶色お速し其秋より彼身へ夢ひ通ひぬぬきとも
 奈何あるとや清野はたつ之助乃ん子随ひされを何幸廉く
 せんを怪くさつ河を道に先玉お打帝鹿野苑軍大夫は世に
 動く逗留さくつりる信信子跟返折く左門之助は酒邊の

対手子出巧言をりく傳り海入大子は討のん子ひぬぬを流産もさ終
 口説落しあつてせんなど諾めるは海辺たけ之助のん子ひぬぬと
 あれむ石抱魚遊而ハ大守附子匠遺さんとあるや軍大夫は世に
 入り夫よりは討のりしとめり法法理を廉せんや先染を身清めて
 封邦へ延連る者ともり玉り自らん子従ふ道理と信兵と君ハ
 左門之助とあめりせ終ふ清野が身お代を傳ひ根川邊てはひき
 つき軍大夫は御さく城外の僻静るるやへ刃を補理是に
 婦女をばくく圍ひ奪せぬれども先子角法那はつぬはさきハ
 染かんを慰廉せんと是秋酒邊松島城催し毎秋たつ之助
 那引きく通ひせ玉ハ放捨の文お同へ藩中乃とり沙汰とも

目録七言言



嶋 昆
 之 沙 新
 圖 門 瀉



自 来 七 十 五 卷 之 二

旗りぬれをころあるあひ眉と頻早てをりきり馬去程に這回
 推津国久入國すたたの之助ハ鹿野苑が武例を推奉りし
 大守附小助いれをせよと久中を得んり新ふと百五石
 を封内を封内を封内縣令職に付られ藩中へ劍術師暫
 兼而勤事をせられり又勇源太高ハ這回供奉より推津乃
 在所小到り重くも刑いらるる事形れども新集お古老お
 比判も荷あせを返して格別先軍太夫同役とにめり
 縣令勅一一同百五石あり鹿野苑と同席とありし
 事ハ始而の見事形れを眼前する敵軍太夫とそれとも
 知くはるるりりると是は是也亦世々國々の封内

所々自來也といふ盜賊小賊許多延連換入自來也といふ
 札法法並令治を奪ひ得るあり遊く乃淫遊めりおん候子
 捨ぬく勇源を帝鹿野苑軍太夫兩個まで合す所とを
 差あて註義なり百捕屋き方申白ぬきふ兩個支配くは
 場所を代り組子延連を重共少重に看田也然るは盜賊
 首領自來也ハ信濃国黒姫山おろく世上此動靜を恐るが
 或時小賊子向くそは越後の國蒲原の邊り小名越長兵衛中
 いる大村長り太せのり帯刀をも免され金銀後室庫子
 満あるは兼て吊引及ぬきハ汝等那家に忍入一働りし
 事くると分説ぬれば小賊共ハ畏りきりくと太早彼地子

白土也... 卷之三

到りしが暫く程徑く立寄り申や〜叔も我々名越の衆に
 忍入んと好ト夜更人静く門を閉ぢて座す内は動靜を
 窺觀するや炬火を〜炬火耀ひて戸の透間より先觀は火の
 方あり下基あり仕奉漢子共一個宛帳面を控へ善くと坐
 勤定合をおひ初靜なれば今宵は首尾惡〜と夫より兩三夜
 忍入を疑ひさあ〜とも毎夜も那者力不無番と又へ例のど
 等と扱く起程は容易忍入〜首領は智恵をも備へ
 後〜彼所不到〜と一先立帰ゆと申や自來也也也考へ
 其のぬ〜者〜と申や同ト人あり夜毎に〜多分
 人ありやあ〜眼の動不動も〜やと尋ねば此程何ひ〜

毎〜同ト人と又〜眼乃と〜ハハ付不中と申ぬハ自來也
 打嘆いさ〜ハ自〜忍入〜ハ等も金銀運運の
 多分兩三個身〜家忍入を着初せ〜支度あり小越
 延連黒姫山と立出那地城さ〜我知る
 名越長兵衛女兒勇正村為美女 併自來也過而
 此擲捕条
 這小浦系那吳買村〜子名越長兵衛と聞〜ハ近師に
 隠き形起巨富の者まで大守〜用金等差出〜刀を
 免さき家内の男女救多〜戸は〜兒共も兩個ありて姉ハ善者
 云ハ牙ハ小ニ帯と叫び兩個と〜いま〜お知れども容貌

自來也
住居之圖



自來也
鏡海樓卷之三



うほく田城も多し力ちて何困るぬ大百姓もそをりけるされば
 勇源大將も主命に似て益成自來也と互捕んと封内
 所くを巡り今日此處より子守りやめさるる縣令の事故村長
 案内(富居)名成長彦方子苗並ゆき長彦も出陣し
 謙く清く入種く長彦は用意たりぬ源太郎がく
 辞していつく主命に似て益成詮義のた先かく巡村ハ
 おせむ村く文彦ありて小前百姓難後なへいゆき
 立出た時當所ハ外村落と違ひ某沖用も相筋等刀も
 清兵衛身よりて是迄投着乃方了某の入用とて無儀

以上小前に入用等掛し筋もこれおぬも早と易一放閑言
 玉るる一と甲りる源太郎も兼て形り及ぐる長彦清彦に
 物人品多れば叮嚀子挨拶りる又廿六歳乃女見業は仕せる
 は多るれ婉婉に見ぬぬ這者其許に女見をぬと尋り
 長兵衛如何事も某熱女見をて善鳥とヤ者おさふくとも行
 田舎故不束の生立小いと早下の言を遠太郎も形る立
 所子儀かふる育成流石ハ名我氏他家柄と子を養言
 らも親心何れ不怡者も何れが長兵衛ゆき女見自
 賛此ん事よりくか厚山家子ゆき善言の教も拙く
 傳れと染ハ近來画も習知雅より和歌詠こも好南三千

一文字子腰拍を撰り金糸の若の懸ともなりはぐくハ認させ
 一匹の河を〜とやぞ這也一具は〜と云き疾くとおもふ
 長丘湯も欣躍酒肴を出し〜原太郎と款待扱女見り
 画をさきい子花鳥山水人物まで小児子稀々墨色也百中
 太子感極く天晴後〜名画の誉も夥し〜あん去来和五首
 飛〜んとあゆむ何ふ子も題玉の原〜と云き保常無類
 郊と云限彩を撰り芳草陽和や〜催
 負郭誰家如有意 窓歸終日此徘徊
 と春日郊行の七絶を撰り 這詩す〜を和歌と
 あ〜ぬきハ〜

誰さともまき成る〜とぬいろあれや

こ〜州先〜も四〜乃〜と云き

か〜舟小志〜と云き

詠む原太郎も殆ど感激〜初〜の曹植が七歩の詩も

中〜と云き

此小女定ておも〜と云き

あり〜と云き

梁ハ曲家娘を〜と云き

貴女子耶〜と云き

先上〜と云き



名越 なごへ
 長兵衛娘 ちやうべゐのむすめ
 席画 せきゑ
 圖 ず

自來井記 巻之二

九〇

満悦の事はあり候を此れは心願ありて西三年は他国より
あまももよみ内を満して西邦まで先内くすあおれは佐助
這許子親と申しは儀事も一個の男子あきども子細りく
嵩のりも茶子もあつてはさきごもはくはと異なれ人女共と
あまもも世はも兼ての心願ありてと改子親子に約連固
ゆきをて書もさきさし縁者ありて是も取戻に候はさき
いと酒通も身支度自らもくれて夜は子及下候はも
あまももしは儀事と深を而も砕と儀事一疾酒量も共
辞一も多も重も切り夜もいつて文あきぶと考く計
ては儀事と改子に改子に改子四文と考く想は自
小賊子業肉をせ世に事あり半は者ごりは分説熱接の端を
宗誠内より門を閉せ候と長き活も志のひ内此動静を
看る小賊の申に不遠大坐下座も不森番とみへて
漢子等とを並く候は儀事小賊の呼ば儀事先に候はも
明るやと身向子如何も彼もへと申すも儀事用意あり候は
後竹と先延候は儀事透間と申すは儀事多那帳面控へて
漢子の類を知らざるに身動もせ儀事等と申すは儀事
子推量に遠く候は儀事人形もあつては儀事上六懼も
我子儀事と申入と雨を申入内入自來也先子なり
方と志て二足三行変に想ひけり候は儀事と

小賊子業肉をせ世に事あり半は者ごりは分説熱接の端を
宗誠内より門を閉せ候と長き活も志のひ内此動静を
看る小賊の申に不遠大坐下座も不森番とみへて
漢子等とを並く候は儀事小賊の呼ば儀事先に候はも
明るやと身向子如何も彼もへと申すも儀事用意あり候は
後竹と先延候は儀事透間と申すは儀事多那帳面控へて
漢子の類を知らざるに身動もせ儀事等と申すは儀事
子推量に遠く候は儀事人形もあつては儀事上六懼も
我子儀事と申入と雨を申入内入自來也先子なり
方と志て二足三行変に想ひけり候は儀事と

暗處下へ余は陥り真倒に陥る柏子相おれ
 半鐘礼廻り着たけりき果益城より家内は天男一同
 起り挑打刃地妙に遊ばせしり小棒乳切本を新板
 立捲ぐおが附持小賊とも八師をひらき逃去り以おき
 源太市も何事なると組子諸共去り看火一個の大漢子
 坑中隔り中へ仕裁し縊れ繩を搦りてつり思えれ互捕と
 下知源太き上りし繩を引上げてはたし自來也那連に手足
 を自縛しかゝおれ佛くことお能くおれがら大勢を平取
 足揮圍く互捕し源太市は流子巻居らさぬぬぬ
 源太市も這迄と見え悟を極め眼を閉ておれおれ

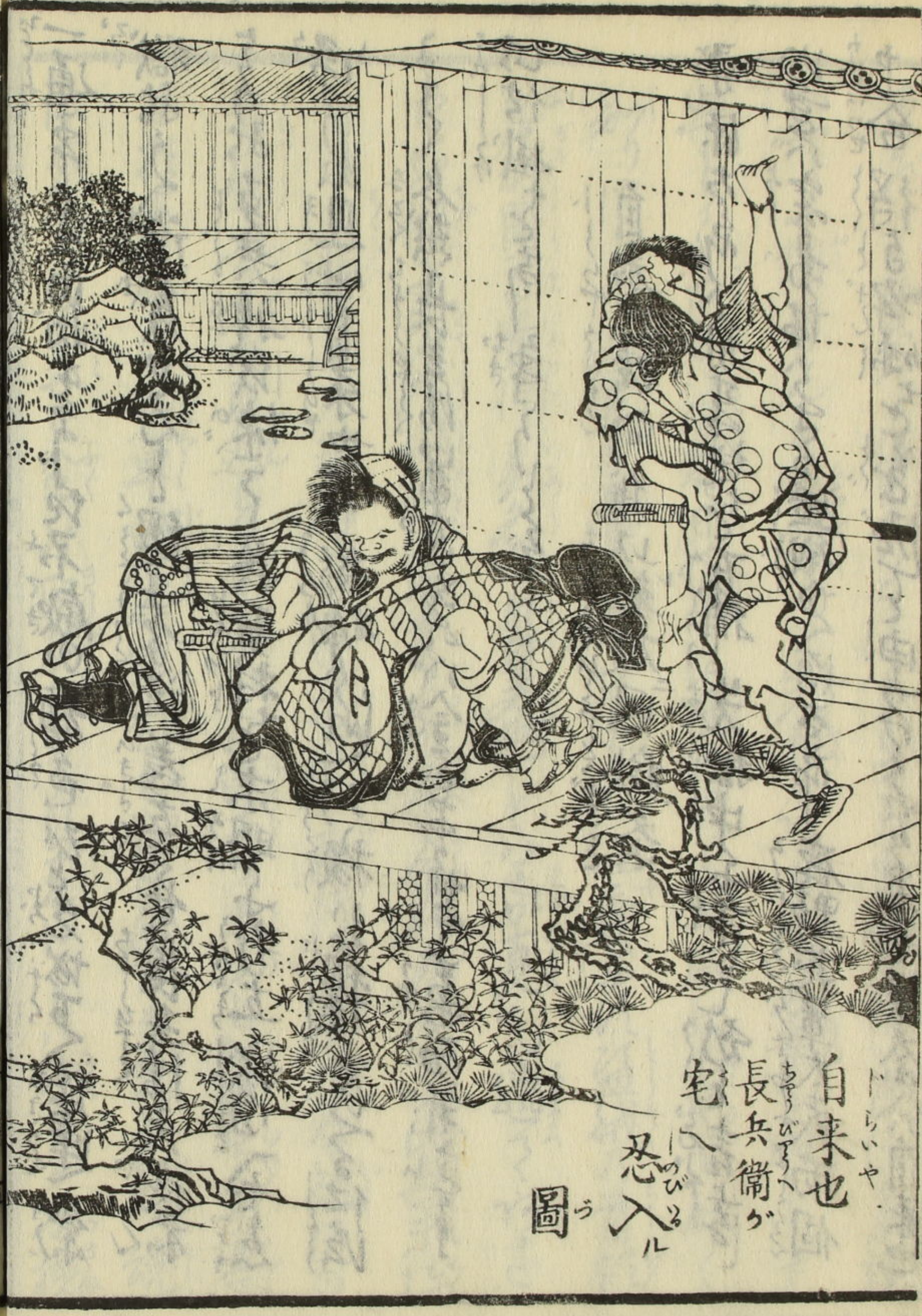
源太市も自來也子向い汝夜中に這来し忍入るい尋ふ及び
 益城あらんが何所の者ぞ各ハ何と申を有竹は白状せよぬ
 言源一く身争ふ自來也眼を閉ておれおれおれおれ
 這奴有司は忍入ると想ひ答てい下へ地おれおれおれおれ
 名何のともや某も申る浪士先汝が姓名を問人と申しきハ
 源太市おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
 我名は中の人と申るハ申聞人某ハ當所は縣令勇源を市と
 りおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
 白代のをよとておれおれ自來也依り拾ひ着し侶吉の又
 なるをいハ其事白地は諺んくと思ひかやく同名も

つるぐりもの名に保るのそと申さるる命即ち度候と未練
のやうに想ひきんも口惜し先折もあんと思案を廻して
いそいそと来るに當り日本に隠れぬく三歳は小兒も能く
知りばうし汝等も難く単城もあつた詮義多しは獄乃首領
尾形周了實行又之に自來也といふ其の過るやうに
也此州に落し入捕られぬるも亦運命に非ざる也比身未練
し白杖をとりかへらるは後早迄の悪行に云ふ及ぬ故徒の
首領今も自來と云ふ入りは汝らが手扱と心得ざる事
おれよびとも老早城下へ連行と云ふ忽ちもおる者視
源太郎も笑を合ふ間及ある自來也といふ汝等も若狭

一通をとり白杖をとりて不敵の顔色ひととて城下へ延運禁
獄せしめ詮義せんと細く考し詮義直させ長き傍に夜未
たりおれ共被成味と云ふ吳賢村を未明に打立城下へ走
帰りぬ見世自來也乃捕縛し巧機ハ箱程と云ふは法
より各越長き傍に冨家ありて金もあつてせし事而利なり
は法掛をとり事なりと云ふ

自來也拷問併以智破因獄条

勇原ちるり、自身也を反捕先獄中より、形と言上る
ゆき、容易あはらるる益獄力源太郎鹿野苑軍大夫兩個
中合得と吟味をを返して申すれらるるを軍大夫の自來也



自来也
自來也
説話
卷之二

自来也
長兵衛が
宅へ
忍入ル
圖

を白濁(ひやくじやく) 惹出(ひきだ)す大音(おほいね)上(かみ)下(した)呼(よ)びて其(その)方(かた)盜賊(とうさく)共(ども)
 自來(じらい)也(なり)と名(な)をいふも實(まこと)の自來(じらい)也(なり)と云(い)ふは其(その)方(かた)
 其(その)名(な)をいふと名(な)をいふも實(まこと)の自來(じらい)也(なり)と云(い)ふは其(その)方(かた)
 首領(しゆりやう)を囚(とら)へし身(み)を捨(す)て自來(じらい)也(なり)と名(な)をいふも實(まこと)の自來(じらい)也(なり)
 眼力(がんりき)に遠(とほ)きをいふは回(まわ)りて真直(まぢま)に白濁(ひやくじやく)をいふは其(その)方(かた)
 其(その)名(な)をいふと名(な)をいふも實(まこと)の自來(じらい)也(なり)と云(い)ふは其(その)方(かた)
 今(いま)汝(なんぢ)が母(はは)の事(こと)をいふは自來(じらい)也(なり)と云(い)ふは其(その)方(かた)

已(おの)が畜生(ちくじやう)士(し)乃(なり)億(いっ)萬(まんに)根(ね)付(つ)け延(ひ)延(ひ)競(きやう)馬(ば)も亦(また)義(ぎ)り取(と)り一(いっ)言(ごん)
 予(よ)盗賊(とうさく)の做(し)はとそる教(きやう)千(せん)個(ご)の首領(しゆりやう)と云(い)ふは其(その)方(かた)
 憐(れん)べ四(よ)六(む)人(にん)を助(たす)け顛(たふ)る仁(に)義(ぎ)礼(れい)道(だう)も知(し)る汝(なんぢ)も亦(また)
 主人(しゆじん)の大事(だいじ)といふは他(ほか)先(まに)逃(に)行(かう)は地(ち)中(ちゆう)指(さし)とそるをいふは其(その)方(かた)
 其(その)名(な)をいふと名(な)をいふも實(まこと)の自來(じらい)也(なり)と云(い)ふは其(その)方(かた)
 小賊(せうさく)を白濁(ひやくじやく)すも不(ふ)可(か)命(めい)を助(たす)くは其(その)方(かた)
 其(その)名(な)をいふと名(な)をいふも實(まこと)の自來(じらい)也(なり)と云(い)ふは其(その)方(かた)
 予(よ)子(こ)何(なに)を問(と)ひ共(ども)畜類(ちくるい)子(こ)等(ら)をいふは其(その)方(かた)



自来也
問の
摺
圖

自来也説話卷之二

五

白眼兩眼を閉く不言軍大夫に赤面做一てそくく逆も道
 ぬ命と想ひ血はさくの謔言欲這坂打まへく白状させ下智
 ちこころ下効共立うり殺ぐ小打擲し身動ぐ小不おれん
 軍大夫焦燥怒るを播子おせよを震動せしも自來也八眼を
 閉く一言此言へんれ持余一あひんて一勇深太帝一立出鹿死
 子白ひ後月六申ぬ今朝あり小苦方千那盜賊同類
 白状させやと尋に軍大夫され先刻より移く品を移
 責回さあへんも未一言とてそくく如夫盜賊け六多をも
 赤浦責苦を擲岩を引ひて白状させ中さへて何れ
 原を帯いつくくまきよりを某一詮義傳へん侍先是下吏

休足あれといふを世坊女まき厚子軍大夫奥にへぬ源を帯
 威を正一自來也此藤子のせくも大石を取除き水一滴を
 與くくくく汝今ひく白状する由苦痛做くより同類
 逆く申へ一乃去流るは流盜女長くそのあふ未後子白状
 事どもも理あぐ更穢ぬれを裁くも向中をきけは向後ハ
 何くをそる先汝を何所を住家と做一物もと物知事子
 裏向かい自來也源を帯を看やくくくく侍ハ天晴も友
 情りれ士しと見ぬれも和勢をひく系住所を尋問住家といふ
 人教を廻一同類を擲捕くを計畧あへんが系下下
 諸國に教乱あ一所く揆入盜盜を做せむ住所ハ何所共

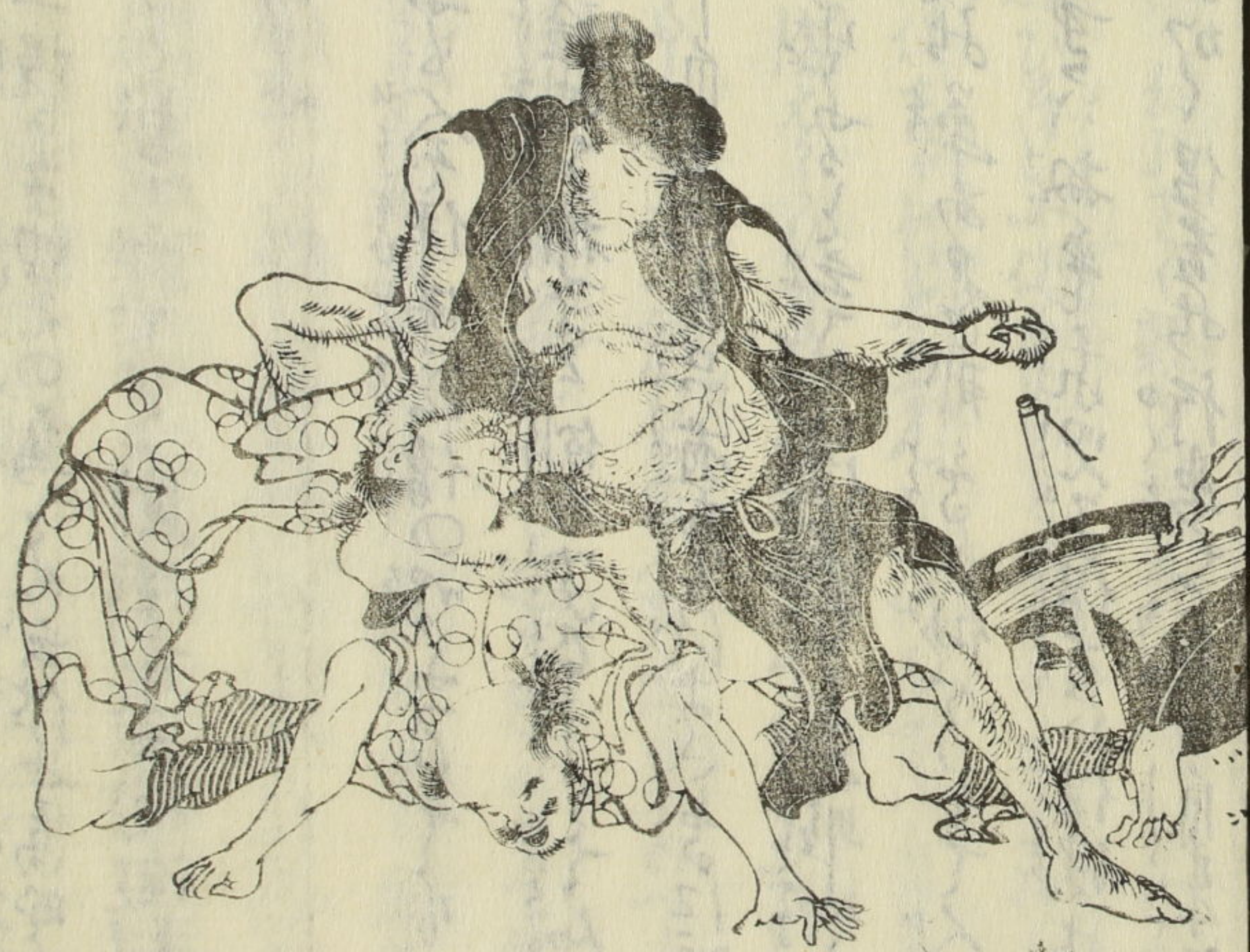
定らるべし思家住家申す汝が息子侶吉といふもの一個疾より
 我牛に今う養育五ハ茲に捕へて安堵せよ返す又始より説話
 とおぼしめし命助り度深子侶吉を忠告せしを思ふけ
 未練の言と聞かんと口惜く然とばけおたを尋らば汝は優
 志りめて見子共在家を白状せんと一首お歌を今をさす
 黒姫純貞あり人の信やうん佛法州乃嘆子ばけりて
 形ゆいゆい深き高信ハ侶吉を養育するはとわぬを我り又
 吾樂社と討つる樂多と想ひぬき六何さぬん有氣此一首
 何判談ハ先汝家ガ見子と養育とありて老人を子子
 并子千余の婦人も一個小兒諸共汝ガ信也小連行とん
 思込白状りて今一をゆてせねまき尋問ハ自奉也可くと
 打嘆ひて老人とハ當國彌彦の山中やゆ申教書せしれ一者
 事あり其時我も汝を山を通り合せ吾問子落ある小兒を
 看付不便に思ひて助帰養育做せし婦人あんと連帰し
 との輝り如言女に心を移すて其某と思ふや後連も助へ
 不思系一人命ある事六事不掛一者を包み隠して何れせん
 つれも涙を流すいひぬて教心晴やん何事子も渠の口より
 仇の動静も知れぬと想ひぬ先今ハ在義も是處
 ぬりと自奉也を獄舎にせ返して熱心自奉也が嘆せし
 一首を考へて子佛法僧といふもの海山までも人住所あり

定らるべし思家住家申す汝が息子侶吉といふもの一個疾より
 我牛に今う養育五ハ茲に捕へて安堵せよ返す又始より説話
 とおぼしめし命助り度深子侶吉を忠告せしを思ふけ
 未練の言と聞かんと口惜く然とばけおたを尋らば汝は優
 志りめて見子共在家を白状せんと一首お歌を今をさす
 黒姫純貞あり人の信やうん佛法州乃嘆子ばけりて
 形ゆいゆい深き高信ハ侶吉を養育するはとわぬを我り又
 吾樂社と討つる樂多と想ひぬき六何さぬん有氣此一首
 何判談ハ先汝家ガ見子と養育とありて老人を子子
 并子千余の婦人も一個小兒諸共汝ガ信也小連行とん
 思込白状りて今一をゆてせねまき尋問ハ自奉也可くと
 打嘆ひて老人とハ當國彌彦の山中やゆ申教書せしれ一者
 事あり其時我も汝を山を通り合せ吾問子落ある小兒を
 看付不便に思ひて助帰養育做せし婦人あんと連帰し
 との輝り如言女に心を移すて其某と思ふや後連も助へ
 不思系一人命ある事六事不掛一者を包み隠して何れせん
 つれも涙を流すいひぬて教心晴やん何事子も渠の口より
 仇の動静も知れぬと想ひぬ先今ハ在義も是處
 ぬりと自奉也を獄舎にせ返して熱心自奉也が嘆せし
 一首を考へて子佛法僧といふもの海山までも人住所あり

自奉世談言卷之二

四

自來也
闇夜
破獄舎
圖



自來也

自來也

て身不任鳥より一説を四是の鳥と云侍子高野史ハ
思發山杯の事ありと勅て聞入つる且昔古監獄詮義の時
縣令と風歌書を餓る子

松の尾山乃真子も人を住佛法僧の唱あつても

といふ古歌をよみて監獄を捕つる例もあつるがそんをよ

借書の有所を教へ自來也を只者あるにまことなるを

佛法州といつる草乃のけつと云ふ信濃なる西郷山の中

善悪く聖四筋宛此草ありと那多に似るとして人にて

佛法州と号とあまらば板を赤兒子借書信濃此思唯
山より善ありともよかく借書此行書と教へ自來也大文

のものと見ゆれば其の類を類と云ふと連行し人
侶吉多自來也と拾ひてし小傳ありと教のころを傳れしと
今監獄の書と刊し借書が行書事人も何事書バ自來也乃
身の上詮義を定他後をよむありと先中傳ふと行書形て
自來也獄舎やありとやあむ夜一個の人数を述べていゝ我ハ
其身を知らず通る監獄の棟野形を述べて述ぬ舎也夫ハ
ばけ巻て監獄する舎子と拾兩と許池乃油紙張一筆を訓
あはれむるを舎を舎書う張る舎子いそ許し入亡傳之り
附し一軸を我お家却まで机子添へせ受て未來を
助りあく想ひはれハ身性乃心あり内く批語いかく

自來乙兒名夫一人

孫んやしく尋ね六那者もろ合し固くん迷ひ汝が申言虚言
 形くべハ秋夕を月速子午無之到り一油合子あるもに
 事さう清さんな一とらぬ親自事也驚び珍くぬ果て
 あと傳も中へ其所ハ自是一里余り滿りし志賀田の街外子
 大ある板あり下子居小松植五ぬれハ地下と云るち急
 白地おれりぬを一子中子そ那一油合子子埋れありと
 教者せ妻人ハ心深くとてそ板取子到り樓の下と云るち
 みるよ一ツの箱を垢出せ一也世を弄バ自事也が云一に不遠
 一油合子二拾兩ありぬれぬ巡子持歸自事也子極つるに
 約速うれむ合子ハもる子腹ひ多し死後子一編の回向

馬場あり一油を我等机身少病く死を快くいさんと獄舎へ
 入入侍バ番人もわい多し二千金を得て子彼境見自事也が
 ん中を思ひやりをれを備へる子心傳も自事也をある板大風
 頻り吹立大雨降を乱せる時折折能れと夜半の頃とい那一油の
 下ある軸を引抜バ兼て仕込一銀一換着出一翁をりて獄舎
 括子と挽切れども雨風烈おゆるもむは拍音お知れさきバ難
 ち括子を挽破り外面へ逃出し折を奪れ以前乃番人目を度
 意ひあを惹捕へ口メ子締教一死骸投捨行人と云るち
 續く起立二個の妻人尤右より細を襟首扱サ眉間の拍子木
 眼狂く倒すを起しちそバ締教一目標と志れぬ暗ぬれバ

漸あや々あや表あやの方あやへ立た生まるまるまるま思おも廻まりの足あし腰こし挑あ灯か下くだげて来きるまるまるま
自い来き也やと見み若わか指さ先さきに挑あ灯かお落おせおせお遠こ也や曲ま者まとあらあとあとあ
振あ解かきあ振あんあとあせあるあまあとあ真まのま當あ身ま子ま呼よとあらあるあ倒たるあ
ひあまあ自い来き也や何なんおあとあもあねあくあ立た返かぬあ

自來也談話卷之二終

